

ともしび

10 月 号

蓮如上人とその時代

川 端 泰 幸

(大谷大学講師)

戦国時代とそのイメージ

皆さま、おはようございます。大谷大学の川端泰幸と申します。私は普段、大学で歴史学の学生を相手に授業をしておりまして、どれだけこの場に相応しいお話ができるか、はなはだ不安でございますけれども、今日はタイトルにございます「蓮如上人とその時代」について、お話をさせていただきたいと思います。

私の実家は、和歌山市にあります浄土真宗本願寺派の門徒でして、幼いころ曾祖父から、一向一揆や、天正十三年(一五八五)に豊臣秀吉(一五三六〜九八)が紀州(紀伊国、和歌山県)の一向一揆に対して水攻めした事件について、よく聞かされました。

そのため、天下人になるような織田信長(一五三四〜八二)や豊臣秀吉をそこまで苦勞せしめた信仰を持った人々というのは、どういった人たちなんだろうかということに疑問を持ち、大学に入りまして、卒業論文などで紀州の一向一揆について書きました。

三年前の二〇一五年、蓮如上人(一四一五〜九九)がお生まれになられてから六〇〇年という節目の年を迎えるにあたって、大谷大学博物館で開催されました「生誕六〇〇年 蓮如」と題する展示に携わらせていただきました。そのような縁もございまして、今日は一向一揆の前提にもなり、あるいは現代に続く浄土真宗の本願寺教団の基礎をつくられた蓮如上人の足跡を、皆さまと共に訪ねてみたいと思います。

蓮如上人をよく「中興」と申します。祖師である親鸞聖人(一一七三〜一二六二)が浄土真宗を開かれた後、本願寺を中心に形成されました教団を大きなものにされたのが蓮如上人であることは、多くの方が認められるかと思えます。

お寺さまへ調査にまいりますと、そこかしこに、蓮如上人のご足跡が残されております。昨年、かやぶきの

里として有名な丹波の美山(京都府南丹市美山町)へまいらせていただきました。若狭から丹波を抜けて畿内へ入っていく街道には、蓮如上人の足跡を伝える大きなお寺さんや「蓮如上人の滝」「蓮如上人腰掛の岩」と呼ばれる遺跡があります。また吉崎御坊の跡地(福井県あわら市)に行ったこともございますが、そういった所で蓮如上人の足跡を拝見するたびに、われわれのような名もない民衆と、本当に親しく、じかに接して教えを説かれた方なんだな、ということを感じます。

私が大学院で教えていただきました大桑齊先生(一九三七)は、ご著書『戦国期宗教思想史と蓮如』(法蔵館、二〇〇六年)のなかで、戦国時代の前半にあたる十五世紀に登場した、浄土真宗の蓮如上人、禅宗の一休和尚(一二三九四―一四八二)などを、仏教の中興者であるとされています。

また日蓮宗・法華宗も、この戦国時代に教線を伸ばしました。特に京都を中心として信徒が増えました。そういった礎をつくられたのが日親上人(一四〇七―八八)という方です。なかなか激しい布教をされた方で、室町幕府第六代將軍の足利義教(一二三九四―一四四二)に直接「法華信仰を持たなければ、この国は滅びる」と訴えるために『立正治国論』を著し、投獄されています。そして拷問のときに、熱い鍋を頭にかぶせられたとの伝説が生まれ「鍋かぶりの日親」と呼ばれました(辻善之助『日本仏教史』第五卷中世篇之四、岩波書店、一九六〇年、ほか)。

そういった方々がおられて、現在の宗派の構図ができたのだと大桑先生は指摘されています。今日は、仏教の中興者が生まれ、かつ教えが急速に広まっていった戦国時代について、仏教史的な視点から見直してみたいと思います。

戦国時代と申しますと、どのようなイメージを持たれるでしょうか。昨年、京都文化博物館で「戦国時代展」という展示がございました。そのサブタイトルは「A CENTURY OF DREAMS」つまり「夢の時代」「夢の世紀」と題されており、すごく印象的でした。子どもどころか、あるいは研究を始めた当初、時代劇や大河ドラマに登場する戦国大名が、新しい時代を切り開いていく英雄のように感じておりました。実際、脈動する変革の時代というイメージを戦国時代に持っている方も多いのではないのでしょうか。豊臣秀吉の草履取りから天下人へ、という話とも共通するように、昨年の展示に付けられた「夢の時代」「夢の世紀」というサブタイトルが、それを象徴しているように思います。

一方で、戦乱の続く大変厳しい時代であったことも間違いのない事実でありまして、その側面についても、よく見なければならぬと思っています。まさに蓮如上人の生きられた時代は、戦国の始まる少し前の段階から、ただ中に入っていく時代であります。

文明的・民族史的な転換期

蓮如上人がお生まれになったのは、「南北朝動乱」あるいは最近「十四世紀動乱」とも言われる動乱期が、収束してくる時代にあたります。

日本中世社会史の研究者として有名な網野善彦先生(一九二八―二〇〇四)は、この時代を「文明的・民族史的な転換期」(「転換期としての鎌倉末・南北朝期」『網野善彦著作集』第六巻、岩波書店、二〇〇七年、初出一九九四年)とおっしゃられました。

網野先生によりますと、文明史的転換とは、一つには、社会の深

部にまで、貨幣経済が浸透してくる事です。また商品作物が登場しまして、流通が全国に広がっていきました。そういうなかで為替手形が出てきました。その手形を持っていれば、京都へ来たときに、手形に書かれた金額の現金に換金できるのです。つまり貨幣経済がもたらしたものの一つに、金融業の発達がありました。借金するときには、大変に高い利息をとるため、お金を返せなくなる人も多くいました。年貢を支払えないお百姓さんのなかには、破産してしまい、身分が転落してしまう人もいました。

また文明的転換として、文字を読む力が大変に発達したことがありました。西洋の歴史を研究している仲間と話をしておりますと、どうも日本人の識字率は非常に高いようであります。村落文書には、土地の金額や面積の書かれた証文が、大量に残っております。そういったことは、なかなか外国であり得ないようです。この時期、日本では文字や計数を操る能力が向上しました。

このように村落に、計算や文字を扱える人々が生み出されてきますと、これまで支配されてきた民衆が、領主の言いなりになるばかりではなく、自立していき、自分たちで意思決定をしていくという動きが起きます。年貢を納めるときにも、責任を持って約束した分を納める代わりに、それ以上介入させないという契約関係を領主に結ばせるくらい、自治能力が高まっていきました。このような村落を「惣村^{そうむら}」と言いまして、典型的な日本の共同体のあり方とも言われています。

こうした流通、情報、あるいは文字が普及することによりまして、ようやく、本州・四国・九州の三つを合わせた「日本国」という骨格ができていきました。室町幕府第三代將軍の足利義満(一三五八―一四〇八)が「日本国王」と名乗るのもこの時代であります。そして、

一つの文化を共有する民族性のようなものが表れてきます。そのため、民族的転換のなされた時代とも言われます。

一方では沖縄諸島を中心とします「琉球国」や、東北部から北海道にかけて、アイヌ及び本州人などを含む北方世界が形成されていきます。現在の列島社会が、おおよそ三つの民族性を持つグループに分化した時代でもありました。

またこの時期、私たちが日本的と呼んでいるものが生み出されたと言われております。茶の湯や立花、また連歌、狂言、能という、いわゆる日本的な伝統芸能や、伝統文化と呼ばれるものは、実はこの南北朝動乱が収束していく時期に、文明的、民族的な転換のなかで、列島社会に生み出されてきたのです。

誕生から青年期

このような時代にあたる応永二十二年(一四一五)、蓮如上人は京都の東山大谷にあった本願寺で生を享けられました。

蓮如上人の生涯において、幼いときにお母さまと離別したことは、大きな出来事だったようです。そのお母さまは、出自がよく分らないということもございますけれども、蓮如上人の立場を考えられて、密かに六歳のときに出ていかれたと伝えられています。その後、蓮如上人は大人になってからも、お母さまの消息を探されたそうですが、最後まで見つかりませんでした。そのためお母さまに対する思いを、生涯抱えておられたのではないかと思います。

ここで蓮如上人がお生まれになって幼少期を過ごされた、応永という時代についてお話をさせていただきたいと思います。先ほどご紹介いたしました、一休さんや日親上人も、この応永の生まれであ

ります。天皇でいいますと、後小松天皇(一三七七―一四三三)という方の時代になります。この応永という時代は、三十四年間もの長期にわたって続いた時代であります。明治以降は一世一元になりますので、一人の天皇陛下がおられる間、元号は変わりませんが、前近代においては、すぐに変まりました。古代では、よい事が起こったときに元号が変えられたということがございました。そして中世には、悪いことが起こったために改元されたことが度々ありました。新しい元号を考える専門家がお公家さんにおいて、その人たちを中心に、国家をあげて一生懸命に考えられました。

そのため前近代の元号は、なかなか長く続きませんでした。そのようななかで、応永の三十四年間というのは、前近代の元号のうちで最長の元号と言われております。関東の鎌倉公方と呼ばれました足利氏と京都の将軍家との間での争いが若干ございましたけれども、政治的には、あまり大きな紛争の起きていない時代であります。

歴史学の分野では、長らくこれを「応永の平和」と呼んでまいりました。ですから、蓮如上人、あるいは一休さんや日親上人がお生まれになられた時代というのは、前近代まれに見る平和な時代であったと理解されていきました。

ところが近年の歴史学の分野では、阪神・淡路大震災や東日本の震災の影響もございまして、気候変動などにも関心が向くようになってまいりました。

清水克行先生(一九七二)のご著書『大飢饉、室町社会を襲う!』(吉川弘文館、二〇〇八年)に、「応永の平和」が生んだ大飢饉という捉え直しをしてみようと書かれてございます。それによりますと、政治的には大きな変化のなかった時代ですが、気候でありますとか、民衆の姿にまなざしを向けてみますと、実は大変な時代であったそ

うです。

それまではあり得なかったような気候不順により、大飢饉がたびたび襲った時代であるということが、史料上、明らかにされてきたのです。とりわけ厳しかったのが応永二十七年(一四二〇)で、まさに蓮如上人のお母さまが本願寺を出られた年から翌年にかけてであります。大飢饉のため、諸国で餓死者や難民があふれかえりました。腐敗したご遺体があちこちにみられたこともあり、疫病が蔓延しました。蓮如上人の幼少期は、まさにそういう時代であったのです。また蓮如上人のお父さまである存如上人(一三九六―一四五七)もお手紙に、諸国の飢饉が大変だということを書いておられますので、間違ありません。

おそらく、蓮如上人がその後の人生で教えを布教していかれた歩みに、幼いころ目の当たりにされた「応永の大飢饉」の惨状が大きな影響を与えただろうと思います。

清水先生のご研究によりますと、貨幣経済の浸透により、例えば米を買い占める商人がいるなど、まさに人間の欲望が噴出してくる大変な時代で、末法の時代のような様相を呈していきました。このような戦国に入る前の状況が、蓮如上人の幼少期でした。

後世の伝記史料である『蓮如上人遺徳記』などによりますと、蓮如上人は十五歳の年に、真宗再興の志願を立てられたそうです。

そして蓮如上人は永享三年(一四三二)の夏に、青蓮院で得度されたと伝えられております。また嘉吉元年(一四四二)に『浄土真要鈔』というお聖教の書写をされました。蓮如上人は若いころ、いろんなお寺へ参られまして、一生懸命、その他にもお聖教の書写をされました。できるだけ親鸞聖人がご覧になられたものに近いお聖教を忠実に書写することを通して、真宗の教えを求めていかれたのです。

本願寺継職と教化

そして長祿元年(一四五七)六月十八日に、お父さまの存如上人が六十二歳でお亡くなりになりました。蓮如上人が四十三歳で継職されました。このとき、蓮如上人の弟さんが跡を継ぐというお話もありましたが、多くのご門徒さんは蓮如上人を推されまして、本願寺第八代を継職されることになりました。

蓮如上人は、まず近江国(滋賀県)の大津辺りを中心に教化を進めていかれました。当初、蓮如上人は「帰命尽十方无碍光如来」と書かれた十字名号をご本尊として、お弟子さんたちに授与されたと伝えられております。これは「无碍光本尊」とも呼ばれました。これに関しては、本願寺派の真宗史研究者であります金龍静先生(二九四九)が詳しく研究されておられます(金龍静『蓮如』吉川弘文館、一九九七年)。絹布に金泥で十字の名号が書かれたものです。お相撲さんの名前を書いたりする勘亭流という書体の原型になったとされる、「うつぼ字」、「籠文字」と呼ばれる独特の書体で、その十字名号の下に蓮台が描かれました。そして上下には、お聖教の文言を記した讃が添えられました。文字の周囲には四十八本の光明が放たれています。

金龍先生によりますと、われわれ一人一人を阿弥陀如来が残らず救いというおはたらきを視覚的に分かりやすく伝えたため、強烈な印象を与えたということです。

そういったご本尊が授与されることによりまして、たくさんのご門徒さんが集うようになったようです。「无碍光本尊」の前に集われる方々ということで、いつしかこのような人々は「无碍光衆」と通称されるようになりました。

そして四十七歳となった寛正二年(一四六二)、『御文』のうち最初のもの(帖外)を蓮如上人が著されました。これは近江金森(滋賀県守山市)の道西(一三九九―一四八八)というお弟子さんの求めに応じて制作されました。

また同年、初めて「寿像」が、近江堅田(滋賀県大津市)の法住(二三九六―一四七九)というお弟子さんに授与されました(『本福寺跡書』、『大系真宗史料』文書記録編3 戦国教団、法藏館、二〇一四年、一六五―一六頁)。「寿像」とは、生前に自らの姿を描かせて授与した絵像でございます。描かれている人物が亡くなった後に授与される「御影」に比べて、特別な意味を持つと考えられています。

大飢饉と改元

またこのころ、「長祿・寛正の大飢饉」という天変地異も起こっています。

長祿三年(一四五九)の五月、当時、干天と呼ばれました日照りが全国的に続きました。それは稲の成長にとって大事な田植えの時期でありました。

そして九月になりますと、今度は大雨、大風がやってまいりました。そのためこの年、農作物は全滅でありました。このような天候不良が、京都近郊だけではなく、全国的に起こったのです。

年が明けまして、翌年の五月から六月にかけては冷害が、九月からは台風、大風雨が続きました。このように中世という時代は、今の想像を絶するほどの不安定な気候であったようです。

蓮如上人より少し後の時代である戦国時代の終盤、九条政基(二四四五―一五一六)というお公家さんが、京都で事件を起こしたた

め、京都におれなくなりまして、しばらく自分の領地がある和泉国ひなのしょう日根莊(大阪府泉佐野市)で過ごされました。そのときに書かれた日記『政基公旅引付』が残されているのですが、そこにも、異常気象で真夏に大量の「霰」が降ったと書かれております。しかも大きさが、今でいいますと十円玉くらいだったことまで記録されています(中世公家日記研究会編『政基公旅引付』和泉書院、一九九六年)。

蓮如上人の時代である長祿四年は、秋になっても稲がほとんど育たず、育つてもごくわずかでした。ようやく収穫の季節になったときには今度、イナゴの大量発生が起こります。このように大変な飢饉であったものですから、朝廷は寛正という元号に改元を致します。この時期、蓮如上人は京都の東山におられまして、しばしば大津あるいは湖東の辺りへ熱心に布教をされ、また洛中でも過ごしておられたと思われます。

長祿四年に改元しまして、その翌年になります寛正二年(二四六一)、諸国で飢えた人が大挙して京都を目指してやってきました。飢饉になると都市である京都へたくさんの人が流入してまいります。そのため京都では、路頭で食を乞うしかない乞食人が数万人に及んだという悲惨な状況に置かれました。

この寛正の大飢饉の様子を、東福寺(京都市東山区)の太極(たいぎよく)(二四二二?)というお坊さんが『碧山日録』(『増補 続史料大成』二〇、臨川書店、一九八二年)という日記へ克明に描かれております。

それによりますと、この太極は、用事があって普段住んでいる東福寺から洛中に入京しました。そして四条大橋の上に立ちまして、鴨川の上流を見ますと無数の屍が流れてきたそうです。大きな石や岩が転がり落ちてくるように見えるくらい、たくさんのご遺体があったのです。そのご遺体によって鴨川の水がふさがれ、蔓延して

いた腐臭は、何とも表現しようがない、と書いております。

この年の正月から二月の一カ月間で、洛中では八万二千人が亡くなったと聞いたと、『碧山日録』に書かれています。筆者の太極が、その話を教えてくれた人に「どうやって八万二千人と分かったのか」と聞きました。そうしたところ、あまりに死者が多いことに胸を痛めたあるお坊さんが、供養をしようと小さな木の板で簡易な卒塔婆を八万四千つくったそうです。その八万四千の卒塔婆を一つ一つのご遺体の上に置いていき、一段落、置き終わったところで二千余っていました。そのため、そこまでのご遺体は八万二千であると分かりました。ただし洛中であつても、自分たちの目の届かないところには卒塔婆を置いていないので、八万二千というのは最低限の数になるようです。この様子を見た太極は、心が震え、涙を流すしかなかった、と書いております。

このとき、幕府なども食事を提供しました。また時宗で活躍されたお坊さんに願阿弥仏という方がおられまして、炊き出しをして人々に振る舞ったり、ご遺体の供養のためにお勤めをしたことも分かっております。しかし、とても手が及ばないような状態でありました。

「応永の飢饉」のころ、蓮如上人は幼少でしたけれども、この「寛正の飢饉」は間違いなく目の当たりにしていたでしょう。東山大谷のすぐそばに鴨川がございますし、その先には洛中がございます。

ところが、この飢饉について、蓮如上人が何かを語られたとは伝えられておりません。蓮如上人は、こういった状況のなかで、どのように浄土真宗の教えを広めていけばよいのか、どうすれば数えきれない苦しむ人々を浄土真宗の教えで救済することができのかを考えていたのではないかと、私は想像をしております。

つまり、天災や人災の起こったなかで、物的な救助など具体的な対応はもちろん大事なのですが、それ以上に仏教の果たさなければならぬ役割があると考えられたのではないかと思います。

と申しますのも、まさに寛正二年は、初めての『御文』が書かれた年でもあります。それから、その年に「寿像」も与えられているということからも、蓮如上人のなかで、この飢饉を一つの契機として、布教が始まっていったのではないかなと思うわけです。

ちょうど一休さんが悟りを開かれたのも、同年だったかと思いますが、お二人とも飢饉について直接、語ってはおられません、大きな影響を受けられたと考えられます。

寛正の法難

そのようななかで、蓮如上人の教えは急速に広まっていくわけでありましたが、困難なこと、つまり試験が蓮如上人めがけて次々とやってくるようになります。一つめの大きな苦難は、寛正六年(一四六五)の大谷本願寺が破却されるという事件であります。親鸞聖人の墓所であり、親鸞聖人の御影がまします御座所でもある大谷本願寺が、比叡山の人たちによって破却されるという非常に有名な事件であります。これを「寛正の法難」と呼んでおります。比叡山のお坊さまたちの言い分が書かれた「叡山牒状」という史料の写しがございます。ここに書かれた比叡山側の主張によりますと、本願寺、つまり蓮如上人の教え、あるいは布教のあり方が認められないと書いてあります。まず比叡山は、「无碍光」という宗派を立てたと認識し、それを問題視しました。また、その宗を建立しまして、愚かな男女や卑しい身分の老若に教えを勧めたことも問題としています。当時の比叡

山をはじめとする国家レベルの大きな寺院、神社は、公家なども含めまして、権門領主にあたります。まさに比叡山は、権門領主としての立場からこのようなことを言ったと思います。つまり領主としての立場からすれば、こういったことは決して認められないのです。それは莊園制や封建制、つまり領主がいて民衆がいるという、まさに世間的、現世的な関係を守るという立場から見ると、この理屈が出てくるのではないかと思います。

当時の人々にとって、何々村の誰々というのが、アイデンティティー、自己認識であります。そのなかへ新たに、蓮如上人はまったく違う論理を持ち込んだと私は考えております。

実はこのとき、蓮如上人は、あえて闘おうとは致しませんでした。

一度は三河国のご門徒であります佐々木如光(？一四六八)という方などが、多額な示談金を工面しまして、示談に持ち込もうとするわけですが、同年、再び比叡山衆徒が襲来しまして、大谷本願寺は破壊されてしまいます。

その後、蓮如上人は北陸へ赴き、京都ではないところで教えを勧めようとしていかれました。その間の応仁元年(一四六七)、京都におきまして、戦国時代の到来を告げる応仁の乱が始まり、京都は焼け野原になっていくのであります。

吉崎開創から退去まで

蓮如上人は文明三年(一四七二)七月まで、大津に身を隠しておられたわけですが、そこから京都を経まして、日本海に面した越前吉崎(福井県あわら市)という浦に坊舎を開創されました。

このころから蓮如上人は、教えを伝えていくなかで、紙に「南無

「阿弥陀仏」と墨書した六字名号を大量に制作されました。今でも、それを伝えておられるお寺さんやお宅がたくさんございます。

先ほど紹介しました、「无碍光本尊」と呼ばれて比叡山から批判の対象となりました十字名号は、その後は授与されませんでした。そのため今でも限られた数しか残っておりません。六字名号につきましては、それ以降、生涯を通して授与していかれました。蓮如上人はこの「南無阿弥陀仏」の六字を、教えのなかでも大事にしていけます。

蓮如上人は、布教のなかでいろんな工夫をされました。「正信偈」「三帖和讃」を出版されますが、先ほども紹介しました『御文』もまとめられました。『御文』が今の五帖八十通という形に編さんされたのがいつかについては、色々な説がありますが、蓮如上人のときには、ある程度の基礎ができていたのではないとも言われております。『御文』とは、お手紙のかたちで分かりやすく仏法、浄土真宗の教えを説いたものです。この『御文』は漢字と片仮名で書かれています。

片仮名と申しますのは、話し言葉を表現するときの表記であると言われています。おそらく蓮如上人は、教えの中身に関しても非常に分かりやすいかたちで説いていかれたのだろうと思います。それによって多くの人々に教えが伝わり、加賀、能登、越中、越前といった北陸地方で、爆発的にお弟子さんが増えていきました。

吉崎御坊には大量の人々が群参したと言われています。ところが蓮如上人は、その『御文』のなかで、単にありがたいからと集まるのではなく、信心を得なければいけない、としばしばおっしゃられています。

それから蓮如上人は、世間と仏法の関係を戒める言葉を述べられています。後に加賀では一向一揆が起りまして、最終的に守護大

名である富樫氏を滅ぼしてしまいます。以後「百姓の持ちたる国」と言われる、百姓の支配する国が生み出されていきます。

ところが蓮如上人の教えが広まっていくなかで、今度は逆に、世俗の勢力との関係が非常に難しくなっていました。文明六年(一四七四)になりますと、富樫氏との闘いが始まり、そのなかで蓮如上人は、ただ世間を批判してはならない、あるいは他宗を批判してはならない、と戒めます。それは、それだけ蓮如上人の教えに共感する人々が多かったことを示していると思います。これは非常に難しい問題で、蓮如上人も苦勞をされたところです。最終的に蓮如上人は吉崎を退去されます。退去して、河内国あるいは京都で、教えを広めていき、さらに『御文』をつくり続けられます。

新たな世界を開いた教え

蓮如上人の教えを受けた人たちに、先ほども申しました惣村の民衆がおりました。蓮如上人が説かれた教えによりますと、阿弥陀如来の救済は、相手を選ばず、誰もが救われるのです。それは権門領主によって支配された、荘園制という枠組みのなかで生きていた人々にとって、まったく違う世界です。

それまでの各村にも、神さまや村堂の仏さまが祀られていました。また荘園制の世界は農耕の世界であり、一つの共同体をつくりまして、それが今の村の基礎になっています。それは、水、用水路を共有する、一つの地域としてのまとまりでもあります。現在も行われているお祭りで祀られている神さまは、毎年の五穀豊穡、つまり、再生産を保証する神さまです。

一方で蓮如上人の『御文』を拝見しておりますと、救済という問題

を必ず説いておられます。つまり戦国の世になって、人々は目の前に起こった理不尽なことに対して、どうしようもない絶望にさいなまれたらうと思います。そのような時代に広まった蓮如上人の教えは、それまでとまったく違う世界に導いたのではないのでしょうか。共同体の神さまや、「どこどこ村の誰誰」という土地の縛り、生まれの条件を一切超越するという、つまり、どこの誰であっても救われるという教えが、蓮如上人の説かれた内容の根幹にあったのです。

戦国乱世のなかで生きる民衆にとって、生きる意味と救われていくという確信を持てたとき、理不尽に満ちた世界がまったく違って見えたのではないのでしょうか。

それは民衆の自立する力と一つになりまして、共同体を作り上げました。つまり阿弥陀如来のもとに平等であるという信仰共同体があります。浄土真宗の教えは、これまでつくられてきた権門領主による荘園制という枠組みの呪縛から、人々を解放したのです。

解放された民衆の行動が、反動として権門領主や荘園制に対する反発の方向へ動くのは必然的であります。一方でそれが、蓮如上人のなかで、生涯を通して大きな課題であったことが、さまざまな言行録からも分かります。

それによりますと、蓮如上人は信心を非常に大事にされて教えを説いておられたようです。『蓮如上人御一代記聞書』という言行録に、たくさんのお弟子さんを前にして「このうちに、信をえたるもの、いくたりあるべきぞ。ひとりかふたりかあるべきか」(聖典八六五頁)とおっしゃられた、とあります。つまり「このなかに、本当の信心というものを持っている人間はどれだけいるんだ。一人か二人いるだろうか」とおっしゃられたのです。それに対してお弟子さんたちは、肝をつぶした、つまりみずからの浅はかさに気づかされて驚愕

したと伝えられています。

蓮如上人のお弟子さんにしもつまれそう下間蓮崇(安芸蓮宗)という方がおられますが、北陸の一向一揆を扇動したとして破門されてしまいました。蓮如上人が病になられて危篤状態にあるときに、もう一度、おわびをしたいということをやつて来られました。それに対して周りのお弟子さんたちは、一回、仏法にあだをなした人間であるからとして、誰も取り次ぎませんでした。蓮如上人は「それは非常に浅ましいことである」と言いまして、「こころがきちんと治ったならば、どのような人も阿弥陀如来は、もらすことなく救われるんだ」とおっしゃられて、お許しになった、という逸話がございます。(『蓮如上人御一代記聞書』二四二条、聖典九〇〇頁)

このように蓮如上人の説かれた教えは、それまでの常識の枠組み、世界観とまったく違いました。これは普遍宗教である仏教から考えると、当然かもしれません、それを現実社会のなかで、人々に説くということは、生半可なことでは決してできません。そういった新しい世界を開かれ、戦国乱世のなかにあつて、確固たる信心、やりどころとなるものをお示しくださったのが、蓮如上人の教化であつたのではないのでしょうか。現代のわれわれがお寺で聞法できる、またご住職やご門徒の方々との出会いを通じて、仏法のありがたさを確かめることができる、そのような本願寺教団の基礎をつくられたのが蓮如上人だったと感じております。まさに、厳しい時代のなかでの生きた仏教の教えを広められたのが、蓮如上人の歩みだったのです。

(かわばた やすゆき)

二〇一八年六月二十四日

東本願寺日曜講演抄録

 聞

経教の鏡

— 自分を知るといふこと

教学研究所周員 武田 未来雄

現代は、インターネットの普及により、高度な情報社会を迎えたが、そのため、多くの情報とどう向きあっていたいのか、様々なところで大きな問題となっているのではないだろうか。たしかに多様な媒体機能によって、自己の意見や考え、感動したことを直ちに発信し、他者と共有の出来る場が多く開かれるようになった。しかし、同時にそうした発信された情報によって、深く傷つけられたり、排除されたりと、苦悩を抱えることもある。自己表現の場が広がる一方で、同時にその発信している自分とは何か、自己自身について見つめていくことも大切ではないだろうか。

私たちは、常に価値を決める基準、言わば「ものさし」を使って、物事を判断している。それは、時には偏った見方になることもある。すなわち性別や人種、身長や体重、顔の美醜、社会的属性などによって他者の価値をはかるのである。しかも、それが意識しないところで、価値判断がはたらいでいる。私たちは、その信じきっている「ものさし」の判断基準の正否、さらにはそれを見る「自己自身の眼」を問う必要があるだろう。

しかし、自分自身で、自分が間違っているかどうかを確かめることはなかなか出来ない。時には、他人からの指摘によって、自分の誤りに気づかされることもあるが、どうしても対立したり、衝突したりする。だからこそ、人間を超えた

眼からの自己省察が必要ではないか。

古来仏教では、「経教はこれを喩うるに鏡の如し」(『真宗聖教全書』一卷四九三頁)と言って、教えは自分自身を省みる大切な鏡の役割をはたしてきた。教えによって、自分自身はどれだけ煩惱にふりまわされ、判断をにぶらされ、偏見でものを見ているのかが、知らされるのである。

特に、唯識仏教では、こうした偏見について、我痴、我見、我慢、我愛の四大煩惱があるといわれる。我痴は自分の本当のすがたに気づかないこと、我見は誤った自分のすがたにとらわれていること、我慢は慢心して自分は真理を知っている信じきっていること、我愛は自分を愛しとらわれていることである。これは常に自分の深層意識において、はたらいでいる煩惱である。どこまでも自分は、自己の考えにとらわれ、自分を是として、自我にとらわれることが教えられている。これら四大煩惱について、曾我量深氏は、真宗の仏道においても、自力我執を考えていく上での大切な教えとされていた。氏は、煩惱を捨て去ることは出来ないが、どれだけ自分たちは我執我見にとらわれているかを自覚懺悔し、そういう自分の現実を常に見ていく必要があると言われる。

様々な媒体を使って自分の意見や感想を表現し、お互いにその情報のやりとりをしていくことは、とても大切なことである。しかし、同時にその自分とは何もののなのか、どのような見地から見ているのか、自分自身を省みることが必要であろう。現代は、外に発信する技術は発展させるが、なかなか内なる自分を正しく見る手だてが少ない。ますます「経教の鏡」は必要なのである。

今後の予定

▼東本願寺日曜講演 ▲ (開会 午前九時三十分)

会場 しんらん交流館2階 大谷ホール

十月七日 (休会) 京都市下京区上柳町一九九 東本願寺北側

十月十四日「維新期における排耶論と真宗」

十月二十一日「帰京後しばらくの間の親鸞聖人」 京都大学非常勤講師、大谷大学非常勤講師、狭間 芳樹

十月二十八日「恵信尼消息に学ぶ」 筑波大学名誉教授 今井 雅晴

十一月四日 京都光華女子大学非常勤講師 渡邊 愛子

十一月十一日 福知山公立大学客員教授 菊藤 正道

十一月十八日 金沢教区浄専寺 平野 喜之

十一月二十五日 (休会)

▼親鸞聖人讃仰講演会 ▲ (開会 午後六時)

会場 しんらん交流館2階 大谷ホール

十一月二十六日 (月) 東京大学教授 下田 正弘

十一月二十七日 (火) 大谷大学名誉教授 小川 一乘

十一月二十八日 (水) 親鸞仏教センター所長 永尾雄二郎

相愛大学名誉教授 西口 順子

同朋大学名誉教授 池田 勇諦

▼高倉同朋の会 ▲

日時 十月十日 (水) 午後六時三十分より

場所 しんらん交流館1階 すみれの間

講師 武田 未来雄 (教学研究所周員)

テキスト 唯信鈔

会費 一回五百円

* *

お問い合わせ先

『ともしび』の内容、「高倉同朋の会」について

教学研究所周員 〇七五—三七—一八七五〇

『ともしび』の申し込み・支払い・発送について

東本願寺出版 〇七五—三七—一九一八九